
MW～優しい君のセレナート～

烈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MW～優しい君のセレナート～

【Zマーク】

Z93010

【作者名】

烈

【あらすじ】

私は歌う事が大好き。それは君が教えてくれた事そして、私が君に伝えたい事

「ええっと……、あ、あつたあつた。」

パソコンの液晶画面に広がったページの中からお目当ての物を見つけ出し、名前の欄をカチカチッとダブルクリックする。少しの読み込み時間と共に画面が切り替わり、画面中央に一枚の絵とその下に再生用のツールバーが表示され、その下部には評価だのリストだと様々なタブが埋め込まれており、迷わずその中にある「DL」のタブをクリック。タブの上部に小さなウインドウ 窓 が開かれ、中には「MP3」や「wav」「SMF」などの英字で書かれたタブが現れ、そこから「MP3」の項目をマウスで押した。

すると、画面左上部に小さな窓が立ち上がり、そこには私がクリックした曲名と「開く」「保存」「キャンセル」の3つのコマンドが表示され、馴れた手付きでエンターキーを一度叩く。すると一度の画面変移が起こり、ステータスバーが表示され、左端から少しづつ緑色の艶やかなバーが右端に向かって伸び始めた。

私はそれを目で確認すると、今度は画面右上部に視線を流す。

そこにはこの曲を投稿した時間と「再生数」「DL数」「リスト数」「評価」が一列ずつ並んでいた。

「うわっ、投稿時間四時つて……、随分遅いなあ……」

パソコン画面の右下部に表示された時間は午前七時。つまり、この曲はつい三時間程前に投稿されたばかりなのだ。にも関わらず、その再生数は既に五〇〇を超えており、DL数も一〇〇をオーバーし

てこる。LJの調子ならば今日中には余裕で再生数は一〇〇〇に達成するだろ？

「ハア……、まあ仕方ないよね」

誰にでも無くボヤく。出来ればこの人の曲は自分が一番最初に聴きたかったのだ。

けれど、この人が投稿した時間帯、私は暖かな布団に包まれて安らかな眠りについていたという訳だ。

ハア、と溜息を一つ吐いて、今度は投稿者のコメント欄を覗く。そこには何の装飾も施されていない黒い文字の羅列でこう書かれていた。

『『どうも。カミナです。今回は星空をテーマに書いてみました。歌詞はともかく、今回もMWに素敵な作曲をしてもらえたのでは是非聴いてみてください！ 追伸：前作のローレ数一〇〇〇超え、ありがとうございました！』』

カミナ、それはもちろん本名では無い。ネット上で自分を名乗る際の偽名のような物である。私はこのカミナという人が歌う曲が好きで、毎日このMW『ミュージック・ウェイヴ』を立ち上げて彼の新作を待ち続けているのだ。

『ミュージック・ウェイヴ』、それは誰しもが待ち望んだ夢のようなソフトの名前だ。

人はそれに自ら得意とする物を持っている。

例えば、作詞の能力だつたり、作曲の能力だつたり、演奏の能力だつたり。あるいは、歌う能力だつたり。

だが、それらは同時に自分の苦手な物でもあつたりするのだ。

作詞は出来ても作曲は出来ない。歌唱力はあつても楽器の演奏が出来ない。

それは長い間多くの人々を悩ませ続け、人々の才能の発芽を滞らせてきた。

自分はこんな曲を作りたいけど才能がない、こんな曲が出来たけど、乗せる歌詞が思いつかない。こんな歌を思いついたけど、自分じゃ歌えない。

そんな人達に、ついに僕倅が見えたのだ。

長きに渡りデスクトップ・ミュージックDTM業界を引っ張ってきたサウンド・ワイザード社が二十年もの歳月を経て、一つのソフトを完成させた。

それが、MW 『ミュージック・ワイザード』である。

このMWは「作詞」「作曲」「歌」を使い手の任意で創りだす事が出来、自分の想像した曲を生み出す事が出来る画期的なソフトなのだ。

サウンド・ワイザード社は遙か昔のレコードから現在出ている最新のCDまでの全てのサンプリングを手に入れ、また作曲に至る全ての音楽や歌詞を独自のシステムで解析し、それらを創り上げるソフトを生み出したのだ。

例えば、春をイメージした歌詞を書いたとしよう。その歌詞をMWに打ち込み、五十以上に及ぶ諮問に応えると、その歌詞にあった曲を自動で産み出すというシステムで、作曲の場合もこれと同じく、曲調をソフトが分析し、諮問に応えると歌詞を付けて仕上げてくれるのだ。声も最新の音声合成技術により、一昔前の機械的な音は解消され、人間の肉声に近い物が出るようになり、歌が歌えずとも自分の好きな歌声を曲に付ける事が出来るようになったのだ。

このソフトの開発により、日本の……いや、強いて言えば世界中の音楽が一変した。

今まで狭き門だった音楽業界の扉が広く開かれ、今では誰しもが簡単に自分の曲を作る事が出来るようになったのだ。

そうして作られた曲は、パソコンソフトのMWを通じて聴く事が出来、自由にダウンロードが出来るようになっている。

今やMWの使用人口は国民の携帯普及率と同じぐらいにまで成長している。幼稚園の学芸会で曲を作ったり、ご老体の方々が演歌を作ったり様々な所で活躍しているのだ。

さて、MWの凄さはこれぐらいにして話を戻そう。

私が好きな力ミナさんは作詞と歌が出来る方で、主に作曲をMWに任せているようだ。

彼の作る詞は何処か甘い感じで『青春』といつ言葉がピッタリ嵌る物だと私は思う。

歌詞を読んでみると、自分と同じような悩みを抱えていたりする一面があつたり、青空の下で走つてゐるような爽快感のある物もある。

でも、私が気に入つてゐるのはそこではない。

私が一番気に入つてゐる物 、それは彼の歌声だ。

なんと言えば良いのだろう、彼の歌声を聴いてるだけで心が暖かくなるのだ。まるで、春の柔らかい日差しの中にいるような、そんな感情が心一杯に広がつて、私は今日も頑張らうと思えるのだ。

ピコン、とダウンロードが終わつた合図が鳴る。

デスクトップ上には新たに『星空ロマン』というファイルが置かれ、それを素早くパソコンに繋いだ音楽プレーヤーのフォルダーにドラッグアンドドロップする。ステータスバーが現れ、物の数秒でプレーヤーのフォルダーに移動が終わる。

プレーヤーを買った当初は使い方で悩んだりした物だが、なるほど。馴れてしまえば簡単な物だ。

パソコンとプレーヤーを繋ぐケーブルを外し、再び画面に表示された時計を見ると、私はパソコンの電源を切つて、足元に置かれた学生鞄の中に音楽プレーヤーを詰め込み、ハツツと一息吐いて気合を入れる。

「さて、そろそろ行きますか！」

鏡の前に立つて制服の乱れを確認。

紺色のブレザーに特に汚れはなくワイシャツもしつかり第一ボタンまで止まっている。白と茶色の線が入ったチェックのブリーツスカートにも特に問題無し。

鏡に写りこんだ自分の顔を覗く。そこには人畜無害そうな顔とサラサラとした深い青色の髪が背中まで伸び、左側頭部には赤いリボンが付けられており、サイドテールのようつに一束が揺れている。問題ない、いつも通りの私だ。

部屋の時計を確認すると時刻は朝七時半丁度。登校するには幾分早いが、今日は予定があるので丁度良いぐらいだね。

今日は月曜日だし、少しばかり気分も落ちてるかと思つたが、そんな感じは一切せず、鞄を肩に掛けると心無しかいつもより軽く感じ、今日は何だか楽しく過ごせそうな気がした。

だつて、今日は帰りの楽しみが、一つ増えたのだから。

/

伴奏の音が止み、フウ と息を着く。すると、ピアノの向こう側からパチパチ、と小さな拍手の音が響いてきた。

「いやあ～、やつぱり遙歌の歌は素敵よねえ……、弾いてる手を止めて聴きたいぐら～よ」

ピアノの方に視線を振ると、短く整えられた小やわっぱりとした髪が特徴的な少女が大きな手振りをしながらこちらへ歩いてくる。

「そんな事ないよ。美優のピアノの音が綺麗だからそういう風に聴こえるんだと思つよ?」

「ここは学校の四階にある音楽室。東側の窓から差し込む朝日が、黒塗りのグランピアノに反射して朝独特の空氣を醸していた。

私は、結川遙歌は同じ合唱部の友人でもある明日乃美優あすのみゆと朝練をしていたのだ。

「いやいや、遙歌がいないといつはならないのよね。……なんていふか、つい最近になつてからなんだけどさ。遙歌の歌声つてただ綺麗じやなくて……その、楽しそうなのよね！　あんたは気付いてるかわからないけど、歌つてる時の遙歌。凄く良い笑顔なんだから！」

「そ……、そう、かなあ」

私は歌う時は頭を空っぽにする癖があるから自分がどんな顔をしているかなんて気にしてた事も無く、美優の直球の言葉に、少しだけ顔が熱くなるのを感じた。

「そこら辺が遙歌の良い所なんだから自信持ちなさいって。おかげでこっちも楽しく引けてるんだから、もう遙歌様様よ」

美優の纖細な手がくしゃりと私の前髪を搔き上げて頭を撫でる。

それがただ嬉しくて、私はへへッと照れ笑いをして誤魔化した。

「どうする？ もうそろそろ時間だし、教室行こうか？」

音楽室の前に掛けられた時計を見ると時刻は八時五〇分に差し掛かり、全校のスピーカーから少量のノイズ音と共に予鈴のチャイムが一斉に鳴り響いた。

「そうだね、時間だし行こうか

私達はパパッと後片付けをし、鍵をかけて音楽室を後にした。

廊下に出ると登校時には無かつた生徒の喧騒で満ちており、私達は騒がしい廊下の中をパタパタと駆けて行つた。

/

「おはー

「おはよー、
遙歌」

「おはすー、
遙歌～」

ざわついた教室に入り挨拶の言葉を投げかけると、四方から返事が返ってくる。

「ちよっと、私もいるんですけどお？」

美優がヤレヤレと最前列の席に着くと、近くにいた女子数名が美優の元に駆け寄った。

どうやらまだ先生は教室に来ていないみたいで皆それぞれのグループに別れて昨日のテレビ番組や、今日の授業の課題についてだの色々な話題が飛び交っていた。

それらを横目に、私は窓際の後ろにある自分の席へと向かって行く。私の席は窓際に近い後ろの場所で、朝方は陽の光が差し込む特等席だ。

そして、その隣の窓際の席。私が座る席よりも更に恩寵給う席に、そいつはこちらに顔を向けながら突っ伏すように眠っていた。

「幸せそうに寝ちゃって……」

朝の暖かな陽光が布団のように背中を照らし、窓から入り込むそよ風が髪を撫でるように吹いていた。

私は荷物を机の上に置くと、席に腰掛けてその顔を観察する。

少しシンシンした黒髪と、縁のないおしゃれなメガネを掛けた少年。

顔には思春期特有のニキビもなく、同年代の男子からすればとても綺麗な顔立ちだ。

眠った顔はとても幸せそうで、口の端からは一縷の液体が流れ、その下に小さな泡を生成していた。ああ……同年代というよりは、小学生とでも言つた方が適當だろつか。そのあどけない顔は高校生といつには少し幼すぎな氣もする。

「……ほんつと、変わらないわねえ」

何氣なく顔を見て呴いた。

彼とは奇しくも小さい頃からの付き合いで、何故か幼稚園から高校まで一貫して同じクラスという最早腐れ縁という言葉でも足らない程の関係だ。まあ……高校を選んだ時は私の意向も……ちょっとはあつたけど。

彼には本当に世話をなつた。小さい頃、きっと彼がいなければ私は……。

ふと、昔の事を思い出すと同時に、彼は重たい瞼を開けて目覚めた。

「んが、ふわあああ……」

グッと背伸びをしながら大きな欠伸を一つ吐いて、彼は寝ぼけ眼でこちらを見やる。

「おはよ……、遙歌」

「おはよう、直くん。ほら、これで口元拭いて」

彼の名前は神崎直哉かんざきなおや、クラスメイトのだいたいは苗字や名前で呼ぶが、私は小さい頃からの癖で、つい「直くん」と君付けて呼ん

でしまつ。

始めのうちは彼に直すよう指摘されていたが、やはり癖という物は簡単には抜けず、彼が折れる形となつて今に至る。

私は上着のポケットからポケットティッシュを取り出すと直くんに差し出した。

彼は欠伸まじりに「ありがとう」と受け取ると、何枚か取り出して子供のように口周りを拭いて、机の上に広がつた池をぼーっと拭きとつた。

「随分眠そうだけど、昨日何してたの？」

私の問いに直くんはさも眠たそうに再び大きな口を開けて欠伸をする。思わず私まで欠伸をしかけてしまった。

「えつと……、なんだつたつけ。朝までゲームしてた」

力チャリと片手でメガネの位置を直すと、さぞやる気が無さそうに机にへばり付く。

「そんなゲームばかりしてると、眼悪くなるよ。」

優しく忠告するも、彼は片手をひらひら振りながら言葉を返す。

「大丈夫大丈夫。部屋の明かりを消してやつてる訳じゃないんだ。これ以上悪くなりやしないって」

「全く……、今に目が見えなくなつて泣きついたって知らないんだからね」

プリツと顔を反らし、鞄の中に入れてあつた教科書を机の中に放り込む。

その時、朝のHRの時間に遅れた担任が教室に現れ、私たちの会話はそこで途絶えた。

横田でチラリと直くんを見ると、彼は先生の話に耳を貸す事もなく、何かを口ずさむように窓の外を楽しげに眺めていた。

その姿を見ると、少しだけ、本当に少しだけ、心の何処かが痛むような感じがした。

/

私が歌を好きになつた理由。それは他でもない、直くんの影響だ。

遠い昔、私が随分小さい頃、母親が失踪したのだ。

理由は今でもわからない。

あの日は、確か隣住まいだつた直くん家から帰つてきた時で、机の上にはただ一言『ごめんね』という書置きだけが残され、その言葉の意味も理解出来ず、私は母親が買い物に行つたのだと思い込んで、帰るはずない母親を待ち続けた。

それから二日間。父親になんて母親が帰つて来ないのかを子供なが

らに尋ねたら、父親は泣きながら私を抱えて「ごめんね」としか言わなかつた。その時、初めて見た父親の涙に云い得ぬショックを受けた幼い私は、訳もわからずに父の胸の中で泣き伏せた。

それからの私は、何処かで母親がいなくなつたという事を理解し、子供ながらに強くなろうと考え、甘える事を一切我慢して家事手伝いをするようになった。もちろん、学校の宿題もしっかりやつたし、成績(だつて中ぐら)にはキープしていた。

そうして過(ご)していく小学六年生の時、ある事件が起きてしまつた。手馴れたオムライスを作り、私は居間で父親の帰りを待つていたのだが、ついうとうととしてその場で眠つてしまい、ある夢を見たのだ。

夢の中では、大好きな母親が私の大好物を作ってくれて、あの時と寸分変わらない優しい笑みをこちらに向けながら、私の話を「うん、うん」と頷いてくれていたのだ。

その夢から覚めた途端、私の中に今まで我慢していた感情が溢れ出し、声を上げて泣き出しあつたのだ。

目からはポロポロと涙が溢れ落ち、今まで出した事も無いような声を上げて泣き続けた。

そんな時、誰かが居間の扉を開けて部屋に入ってきたのだ。

父親が帰つてきたと思つて泣くのをやめたが、そこに立つていたのは、父親……、ではなく、直くんだった。

直くんは何も言わず私の事を抱きしめると、ある歌を歌つてくれた。

それはいつか学校の音楽の時間に習つた曲で、奇しくも私のお気に入りの歌だった。

直くんの歌声は、まるで子守唄のように優しく、思わず泣くことも忘れて私は直くんの膝の上でその歌に耳を傾け、気付いた時には自分の布団の中にいた。

それから直くんは、いつも私の元を訪ねては覚えたての歌を唄つて私を勇気づけてくれるようになり、私も彼と一緒に歌を唄つて、徐々に辛い出来事から救われていった。

しかし、ある日を境に直くんは歌を唄わなくなつてしまつた。

理由は後でわかつたのだが、直くんが私に歌を唄つて励ましてくれていた事が何処からかクラス中に漏れたのだ。

小学生という多感な時に、そんな行為をしていると知られれば、当然何らかしらの対象になつてしまつ。

例え、私がそれを否定した所で、子供に理解出来る訳も無く、火に油を注ぐだけでしかなかつた。

そんな事もあつて、私と直くんは小学校高学年から中学を終えるまでの四年もの間、一言も口を聞く事は無かつた。いや、出来なかつたのだ

そんな彼にどうしても謝りたくて、私は先生の反対を押し切つて直くんが行く高校に入学した。もちろん、今になつて私が何か出来る

訳でもないし、失われた四年間を戻す事だつて出来ない。

でも、今度は私が彼の為に歌う事が出来る。だからこそ、私は同じ高校に進んだのだ。

そうして久々に言葉を交わしたのは、昨年の四月。

この学校に入学した、初めての朝の事だった。

家の前で彼が出てくるのを待ち、せめてこの四年間の事を謝り、彼の手助けをさせて欲しいと進言しようと思つたのだ。

罵声を浴びたつて構わない、嫌いだと言われても良い。

決死の想いで彼を待ち、彼が家から出ってきた。

私は彼の前に立ち、頭を下げようとした　　のだが、彼は私よりも先にある言葉を発した。

「その制服　　、似合つね」

彼は照れたように笑みを浮かべると、頬を搔きながら私の制服姿を褒めてくれた。

彼は、この四年間の事を一切気にしていなかつたのだ。

制服を似合つていると言われた事が嬉しかつたのか、はたまた彼が怒つていなかつた事に安堵したのか、私はその場で泣き崩れてしまい、あの時のように彼の胸の中で泣き続けていた。

でも、それでも、彼の優しい歌声は戻って来なかつた。

/

「……遙歌」

彼の優しい呼声がする。ああ、私は眠つていたのか。重く閉じた瞼を開けると、そこは夕暮れ色の教室で、目の前には優しく微笑む彼が「一二一二」と「ひひひ」を見ていた。

「あつ……、えつ、や……」

夢の中で見ていた彼とダブリ、思わず顔が紅潮していくのがわかる。夕陽の色でバレなければ良いのだけど……。

「なつ……、なんで直くんがここにいるのよー?」

「あ、心外だなあ。今日は月曜日だから一緒に帰らうつて言つたの遙歌だぜ?」

「ああ、そういえばそんな事言つていたよつな……。

「……ツじやなくて! どうして起こしてくれないのよー!」

顔を背けながら、そいそと帰り支度を整える。

「そりゃあ、寝ている人を無碍に起こす訳にもいかないしさ。それに、寝顔も可愛かつたし」

最後は小さく呟いたはずなのに、その声はハッキリと私の耳朵を揺らした。

更に顔の温度の上昇を感じ、私は鞄で彼の頭を叩いて足早に教室を後にする。

その後、昇降口で待つていると彼は駆け足で現れ、手早く外靴に履き替えて、私の前を歩き出した。

彼は私の少し前を歩き、私はそれに追従するよつて歩く。

私達は普段一緒に帰っているけど、そこに殆ど会話はない。

もちろん、彼に話しかければ返してくれるし、彼の場合もしつかりと私は返す。

でも、何故か私達はこうして距離を保つて歩いていた。不思議な事に、私はこつして帰る事が嫌いじゃなかった。いや、むしろ望んでいた。

彼の後ろを歩きながら、お気に入りのアーティストの曲を聴き、暮れなずむ川べりを歩く。

それは、とても静かで、とても穏やかな時間だった。

それが、彼にとつても同じであつたらな、と何気なく思つ。

校門を出て、少し歩くと大きな橋に差し掛かり、私達はその橋を渡らずに右の川下の方へと歩き出す。

ササッと準備していたプレーヤーを取り出し、イヤホンを耳に当て、宝物を開けるように再生ボタンを押した。

耳元から、MWによつて作られたアコースティックギター特有の低音が静かに流れだす。

その音は何処か切なくて、不思議と今のような黄昏空にマッチしていた。

少し長い前奏が終わつ、やうやく彼 『カミナ』の歌声が耳に届く。

君が涙を流すなら、僕はそれを乾かす太陽となつ。
君が夢を求めるなら、僕はそれを繋ぐと標となつ。

それは、随分と在り来りな恋人を思う歌詞だった。

それでも、その暖かな歌声は私の心を掴み、春風のような優しさで、私の心に染みていく。

ソフトで作られたとは思えない綺麗な曲と、『カミナ』という人の心を表すよつた穏やかな歌詞。そして、不思議な包容力で私を包み

込む歌声。

オレンジの色に輝く川が、いつもより綺麗に見え、空に輝く星が音と同調するように燐然と輝いていく。

星に祈ろう、君の笑顔を。
月に願おう、君の幸せを。

不思議だった。

彼の歌声は機械が生み出した物でしかないはずなのに、こんなにも、こんなにも私の胸を強く打ち、心の中に充ち溢れていいく。

やがて、それは一滴の形となり、頬を伝つて零れ落ちていく。

気付いたら、私は目の前にいる彼の背中にヒシヒと身を寄せていた。

「……どうかした？」

「……なんでもないよ」

彼は、こちらに振り向く事も無く、その優しい声で私に尋ねる。

嘘だ。

本当は、本当は言いたい事がいっぱいあった。

でも、それは絶対にしてはいけない、私が決めた不文律。

いつか。そう、いつか、彼が私にその歌声を聴かせてくれるその時まで。

私は何時までも待つていよう。

いつか、本当の声で、彼が唄ってくれる……、その時まで。

大きな太陽になれなくたって構わない。

君の道照らす一つの星になればそれでいいんだ。

涙が零れ落ちないよ、空を見上げる。

そこには、他の星より一層強く一番星が輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9301o/>

MW～優しい君のセレナート～

2010年11月15日05時55分発行